

Title	saddharma という複合語について
Author(s)	河崎, 豊
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 40 P.1-P.15
Issue Date	2006-12
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/8163
DOI	
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

saddharma という複合語について

河 崎 豊

【0】 かつて Geiger 夫妻は、saddharma (pāli·ardhamāgadhī saddhamma, 以下 sdh と略。漢訳：「正法」「妙法」¹⁾ 等) が 'gute Lehre' より寧ろ 'Lehre der Guten' と訳されるべきこと、即ち karmadhāraya [kdh] ではなく genitive [gen.] tatpuruṣa [tp] だとした²⁾。この説を、我が国の若干の学者たちも採用した³⁾。一方で代表的なパーリ語辞典では、夫妻の研究の参照を促しつつ kdh の如き訳も与え⁴⁾、解釈の余地を残したようでもある⁵⁾。そこで本稿は、夫妻が利用しなかった幾つかの資料を検討することで、夫妻の説に若干の肉付けをしたい。本稿は限られた資料内の議論ではあるが、sdh をめぐる研究に少しでも寄与できればと思う⁶⁾。

【1】 そもそも、仏教徒は sdh を如何なる種類の複合語であると理解していたのか。まずこの点について、pāli aṭṭhakathā の理解を検討する。

【1.1】 第一に、sdh を gen. tp と看做す解釈が存在する：

- (1) asaddhamman ti asataṃ nīcajanānaṃ dhammaṃ. 「asaddhamma とは正しくない人々の〔つまり〕劣った人々の法を〔という意味〕」
(Sp I p. 221)
- (2) asaddhammo ti asataṃ nīcajanānaṃ dhammo. 「asaddhammo とは、正しくない人々の〔つまり〕劣った人々の法が〔という意味〕」
(Sp I p. 256)

- (3) *n' eso passati saddhamman ti eso poṭhilo bhikkhu satam buddhād-
īnaṃ dhammaṃ magga-phala-nibbānaṃ na passati.* 「*n' eso passati
saddhamman* とは、このポーティラ比丘は正しい人々の〔つまり〕
仏陀をはじめとする人々の *dhamma* を〔つまり〕道・果報・涅槃
を見ない〔という意味〕」(Th-a III p. 170)

逆に、*asataṃ dhammo* 「正しくない人々の法」を *asaddhamma* で説明する
例も存在する：

- (4) *asataṃ ca dhammo ti dvāsaṭṭhiditṭhigatabhedo asaddhammo.* 「*asataṃ
ca dhammo* とは六十二見という区分を有する *asaddhamma*」(Mp
III p. 89)

【1. 2】一方で、*sdh* を *gen. tp* と *kdh* の双方で説明する註釈も存在する：

- (5) *asaddhammā ti asataṃ dhammā, asanto vā dhammā asobhanā hīnā
lāmakā ti attho. saddhammā ti satam buddhānaṃ dhammā santo vā
dhammā sundarā uttamā ti attho.* 「*asaddhammā* とは正しくない人
たちの諸法である。あるいは正しくなく、綺麗でなく、欠け、衰
れた諸法という意味。*saddhammā* とは、正しい人々の〔つまり〕
諸仏の諸法である。あるいは正しく、素晴らしく、最上の諸法と
いう意味」(Sp VII p. 1341)

- (6) *asataṃ dhammā asantā vā dhammā lāmakā dhammā ti asaddhammā
vipariyāyena saddhammā veditabbā.* 「正しくない人々の諸法、あ
るいは正しくない諸法〔つまり〕劣悪な諸法が *asaddhammā* であ
り、反対が *saddhammā* と知られるべし」(Sv III p. 1039)

- (7) *saddhammehī ti sundaradhammehi satam vā sappurisānaṃ dham-*

mehi. 「saddhammehi とは、素晴らしい諸法によって〔という意味〕。あるいは、正しい人々の〔つまり〕正しい人間たちの諸法によって〔という意味〕」(Ps III p. 29)

(8) *asataṃ dhammā lāmakatṭhena vā asantā dhammā ti asaddhammā.*

「正しくない人々の諸法、あるいは劣悪という意味で正しくない諸法というのが *asaddhammā*」(Vibh-a p. 509)

同じ Sp 内で (1) *gen. tp* (2) *gen. tp* もしくは *kdh*、という二つの解釈が行われる点⁷⁾が注目され、こういった上座部の見解に従う限り、*sdh* を *gen. tp* と断定することは問題がある。

【1.3】 更に *sdh* を *kdh* のみに理解する例もある⁸⁾：

(9) *saddhammehī ti sudhammehi.* 「*saddhammehi* とは良い諸法によって〔という意味〕」(Mp IV p. 56)

【1.4】 伝承で解釈部分の読みが揺れる場合もある：

(10) *asaddhammehīti asataṃ dhammehi.* 「*asaddhammehi* とは正しくない人々の諸法」(It-a p. 99)

Pali Text Society 版ではこのようにあるが、ミャンマー版・タイ版では、*'asaddhammehīti asataṃ dhammehi asantehi vā dhammehi'* とあり、【1.2】で確認した二者択一の解釈を提示する。

【1.5】 このように、*pāli aṭṭhakathā* では *sdh* を (1) *gen. tp* とする (2) *gen. tp* と *kdh* の双方の解釈を示す (3) *kdh* とする、という3タイプの理解が存在する。また註釈の同一箇所でも、伝承によって解釈を異にする場合もある。故に伝統説に依る限り、*sdh* を *gen. tp* と理解するには問題があ

る。なお、tp・kdh以外の解釈も可能性としては有り得るが、少なくとも *aṭṭhakathā* には見出せないようだ。

【2】 以上は注釈者の *sdh* 理解だったが、遡って聖典ではどうだろうか。ここでは、Geiger 夫妻の扱わなかった聖典古層部分⁹⁾ の一記述を取り上げる。SN X. 7 (p. 453)¹⁰⁾ は、釈尊がアナータピンディカの遊園に留まった際の、プナッバスなる者とその母の夜叉女との対話を描写するが、詩節中に *sdh* を別の言い回しで述べたと判断し得る箇所がある(太字は筆者)：

tuṅhī uttarike hohi tuṅhī hohi punabbasu /
 yāvāhaṃ **buddhaseṭṭhassa dhammaṃ sossāmi satthuno** //828//
 nibbānaṃ bhagavā āha sabbaganthappamocanaṃ /
 ativelā ca me hoti asmim̐ dhamme piyāyanaṃ //829//
 piyo loke sako putto piyo loke sako pati /
 tato piyatarā mayhaṃ assa dhammassa magganā //830//
 na hi putto patī vā pi piyo dukkhā pamocaye /
 yathā **saddhamassavanāṃ dukkhā moceti pāṇinaṃ** //831//
 — 中略 —
 sādhu kho paṇḍito nāma putto jāto uresayo /
 putto me **buddhaseṭṭhassa dhammaṃ suddham** piyāyati //836//

お黙り、ウッターちゃん¹¹⁾。お黙り、プナッバス — 私が、覚醒者らの中で最も優れた者¹²⁾である師の法を聞くであろう間は [828]。世尊は「涅槃とは、一切の束縛を放つもの」と言う。そして私には、この法に関して非常な愛情が生じている [829]。世間では、我が息子は愛しく、世間では、我が夫は愛しいものだ [が、] それよりもこの法の探求が、私には愛しい [830]。何故なら *sdh* を聞くことが生き物

〔である私?〕を¹³⁾ 苦しみから解放させる如くには、愛しい者は
 — 息子あるいは夫ですら — 苦しみから解放させてくれないから
 [831]。 — 中略 — 胸のところで横たわる〔我が〕息子は、賢いもの
 のというのになっている。我が息子は、覚醒者らの中で最も優れた者
 の、純粹な法を愛している [836]。

【2.1】 828 偈 ‘buddhassetthassa dhammaṃ sossāmi satthuno’ が 831 偈
 ‘saddhammassavanam’ に対応する (buddhassetthassa... satthuno → sad-,
 dhammaṃ → -dhamma-, sossāmi → -ssavanam) と言い得る。つまり sat を
 buddhassetthassa satthuno で表現したものと看做し得、経典作者 (たち)
 が sdh を gen. tp と理解していた証拠と考えられる。

【2.2】 836 偈 ‘buddhassetthassa dhammaṃ suddham’ も sdh の言い換えだ
 ろう。ここでも buddhassetthassa という表現があり、先と同じく gen. tp 理
 解の存在を予想させるが、suddham の存在は微妙である。これを含めた
 buddhassetthassa suddham が sat に対応するなら、sat と dhamma とは同格
 関係にあることになる。もしそうであれば、聖典の最古層に kdh 的理解
 があることとなり、それが註釈家の理解にも影響を与えた可能性を考慮す
 る必要がある。しかし【1】で見た如く、註釈が sdh を説明する場合、sat
 は sundara や (a)sobhana で言い換えられ、suddha ではないことを考える
 と、かかる聖典の表現が註釈の kdh 理解に影響を与えたとは考え難
 い。尤も、註釈段階で sundara や sobhana や suddha が「美しい」という
 意味での同義語と理解されていた可能性はあるかも知れないが、本来これ
 ら三語は各々「美」の指し示す方向性が異なり¹⁴⁾、各語の原義を重視す
 ればこれらが言い換え可能な概念だという判断は下し難い。最終的にはパ
 ーリ文献全体に亘る √sodh, √sobh, sundara の調査が必須だが、個々の基
 本的な意味に従えば、如上の可能性は低いと判断する。更に【4】の

visuddhasaddhamma という表現も参照。

【3】 Geiger 夫妻が *sdh* を *gen. tp* と看做す根拠のひとつは、*pāli* 仏典中の *sataṃ dhamma-*「正しい人々の法」¹⁵⁾ という表現と *sdh* とが平行表現であると見る点にある。夫妻によれば以下の如き例がある：

*saddhammam anussarati*¹⁶⁾ (Cp 3.10.5=vs. 327)

*anussarivā sataṃ dhammaṃ*¹⁷⁾ (Cp 3.12.5=vs. 350)

santo sataṃ dhammam anussarantā (Jā III 492)

これは夫妻にとって非常に有力な証拠である。ところが、以下に挙げる例は一見すると *sdh* が *tp* とは取り難い。それは SN I 4.1 (p. 37)¹⁸⁾ で繰り返される表現である。試みにその内の一偈を挙げる (太字は筆者)：

sabbhir eva samāsetha sabbhi kubbetha santhavaṃ

sataṃ saddhammam aññāya seyyo hoti na pāpiyo ti (78)

他ならぬ正しい人々と共に座るべし。正しい人々と共に親交するべし。

正しい人々の *sdh* を知った後、人はより優れた者となり、より悪い者とはならない。

問題は *sataṃ saddhammam* である。*sdh* が *gen. tp* なら「正しい人々の正しい人(々)の法」となるが、これは奇異な表現に見える¹⁹⁾。故にこの例は、一见すると *sdh* が *gen. tp* ではないという証拠と考えられるかも知れない。

【3.1】 ところが、仏典には時折 *sataṃ saddhammam* の如き表現が見出される。以下、筆者が見出した若干の例を列挙したい：

(1) ... *gāmassa gāmasimā nigamassa vā nigamasimā*... 「村の、村の

界、あるいは町の、町の界」(Vin I p. 110)

- (2) ... bālassa bālalakkhaṇāni bālanimittāni bālapadānāni. 「愚者の、愚者の特徴・愚者の特色・愚者の特質」²⁰⁾ (MN III p. 163)
- (3) saṅkhatassa saṅkhatalakkhaṇāni ... asaṅkhatassa asaṅkhatalakkhaṇāni. 「有為法の、有為法の諸特質……無為法の、無為法の諸特質」(AN I p. 152)
- (4) khandhānaṃ khandhaṭṭho ... dhātūnaṃ dhātuṭṭho ... āyatanānaṃ āyatanaṭṭho ... saṅkhatānaṃ saṅkhataṭṭho ... asaṅkhatassa asaṅkhataṭṭho ... 「諸蘊の、蘊の意味……諸界の、界の意味……諸処の、処の意味……諸有為法の、有為法の意味……無為法の、無為法の意味」(Paṭi p. 17)
- (5) śarīre śarīrapūjā 「遺骨に対する、遺骨に対する供養」(*Mahāparinirvāṇasūtra* [ed. E. Waldschmidt] 48.8)
- (6) devānaṃ devānubhāvam 「神々の、神々の威力」(*Saddharmaṇḍarīka* [ed. Kern & Nanjio] p. 164)²¹⁾
- (7) puṣpānaṃ puṣpavarṣam 「花々の、花々の雨」(*do.*, p. 328)
- (8) dharmeṣu dharmacakṣur 「諸法に関する、諸法に関する眼力」²²⁾ (*Ṣaṭṣaṭīkā Prajñāpāramitā* [ed. J. Masuda] p. 240)
- 【3.2】 こういう表現は白衣派ジャイナ教聖典にも見られる：
- (9) jakkhassa jakkhāyayaṇe 「夜叉の、夜叉の居住地」(*Nāyādharmakāhāo* [Jaina-Āgama-Series] 1.5, p. 108)

【3.3】以上の表現は、インド正統派文献でも *Rgveda* 以来しばしば見られることが既に指摘・検討されている²³⁾が、こういった表現では複合語の直前に現れる名詞の格・数が複合語前分の格・数と一致するようだ。筆者が挙げた例も全て、直前の名詞の格が複合語前分の格を示していることはほぼ確実である。そして *satam saddhammam* も上の諸例と同様の表現と筆者は考える。即ち、*satam* は *saddhammam* における *sat* の格を明示する — *satam saddhammam* なる表現は、経典作者（たち）が *sdh* を *gen. tp* と見ていた証拠になる、と。

【4】最後に白衣派ジャイナ教聖典中の *sdh* を検討するが、同聖典での *sdh* の出現は利用し得る各種単語索引²⁴⁾を見る限り、*seniors* の一つである *Uttarajjhāyā* [ed. J. Charpentier] 3.19 のみ：

bhoccā mānussae bhoe appaḍirūve ahāuyam
 puvviṃ visuddhasaddhamme kevalaṃ bohi bujjiyā (19)
 cauraṅgaṃ dullahaṃ mattā saṃjamaṃ paḍivajjiyā
 tavaśā dhuyakammaṃse siddhe havai sāsae (20)

寿命に応じ、比類なき人間的な諸享受物を享受した後、かつて清らかな *sdh* を持つ者〔だったので〕唯一の覚醒に目覚めてから、(人間の状態・ジャイナ教の教えを聞くこと・ジャイナ教を信じること・自制における勇氣という) 四支分が得難いものだと考え、自制へと達し、苦行によって業の残りを振り払い、永遠の成就者となる。

【4.1】まず *visuddhasaddhamma* という表現は、*visuddha* と *sat* とが異なる概念だったことを窺わせ、【2.2】での筆者の想定を傍証する。次に *visuddhasaddhamma* に対する註釈²⁵⁾を確認する：*Cūrṇi*²⁶⁾には説明がないが、*Śāntyācārya*²⁷⁾ (p. 156) は ‘*pūrvam pūrvajanmaviśuddho nidānādirahi-*

tatvena saddharmaḥ śobhano dharmo 'syeti viśuddhasaddharmā' 「pūrvam [つまり] 来世への邪念²⁸⁾などを離れている状態を通じ、前世で浄化されている saddharma [つまり] 綺麗な法がこの者にある、というので viśuddhasaddharma」とあり、sdh を śobhana dharma 「綺麗な法」つまり同格関係と理解する。一方、Nemicandra²⁹⁾ (p. 52) は、'pūrvvaṃ pūrvajanmasu viśuddhasaddharmā nidānādirahitatvena śuddhaśobhanadharmāḥ' 「pūrvam [つまり] 諸々の前世で viśuddhasaddharmā [つまり] 来世への邪念などを離れている状態であるがゆえに、浄化され綺麗な法を持つ」とする。この場合 sdh を śobhadharma と複合語で説明するため判断し難いが、この箇所の説明が Śāntīyācārya の説明を踏まえた上で簡略化したようであることを考えれば、Nemicandra も sat と dharma を同格関係と理解していた可能性が高い。

【5】 以上を要約する：atṭhakathā では sdh について (1) gen. tp (2) gen. tp か kdh (3) kdh という3タイプの理解が混在する。【1】。gen. tp の理解を示していたと看做し得る表現が、聖典の最古層にある【2】。satam saddhamma- なる表現は、sdh を gen. tp と理解していたことを示す可能性が高い【3】。白衣派ジャイナ教聖典では sdh の用例が少なく、註釈段階では sdh を kdh と理解する例がある【4】。

Geiger 夫妻が指摘した例や今回筆者が指摘した若干の例は、初期仏典作成者の内の少なくとも一部が、sdh を gen. tp と理解したことを示しているが、仏教・ジャイナ教註釈者の kdh 理解も無視できない。この点、例えば dhammo santo/santo dhammo と二語にして表すと「法が存続しつつ、存続しつつある法が」等の意味に解され、また sānta 等に誤読されるかも知れない³⁰⁾。そこで「正しい dhamma」と言う時は複合語にした、という可能性などは考慮する必要があるだろう。いずれにしても、更に調査範囲を広

げて検討しなければならない。

注

- 1) 鳩摩羅什は *Saddharmapundarika* に妙法蓮華經の訳を充てたが、既に金倉圓照「法華經における法護と羅什の訳語 — 特に序品について —」『法華經の中国的展開』(平楽寺書店, 1972, pp. 445-470, esp., p. 448 が指摘する如く、妙は sat の訳語として「原意を逸脱している」。この点について金倉氏は老荘思想の羅什への影響を見るが、伊藤隆寿「鳩摩羅什の仏教思想 — 妙法と実相 —」『佛教学』30 (1991), pp. 1-27 は、金倉論文を踏まえ、羅什自身の仏教思想、特に実相に対する理解が妙という訳語を充てさせた可能性を論じている。但し伊藤氏によれば (p. 12)、羅什が sdh の訳語に妙法を充てたのは経題としての *Saddharmapundarika* における sdh のみで、他の箇所では妙法と訳された対応語に sdh はないらしい。また Seishi Karashima, *A Glossary of Kumārajīva's Translation of the Lotus Sutra* (Tokyo), 2001, p. 361 を見る限り、羅什が正法という訳語を使う場合、その対応語は常に sdh のようだ。
- 2) Magdalene & Wilhelm Geiger, *Pāli Dhamma vornehmlich in der kanonischen Literatur* (München), 1920, p. 53 = *Kleine Schriften* (Wiesbaden), 1973, p. 152.
- 3) 例えば、本田義英『法華經論』(弘文堂書房), 1944, p. 14; 山口惠照「法華經とインド哲学 — 方法論的考察(覚え書き) —」in: 中村瑞隆(編)『法華經の思想と基盤』(平楽寺書店), 1980, pp. 19-41, esp., p. 31f.; 塚本啓祥「正法の原義とその展開」in: 勝呂信静(編)『法華經の思想と展開』(平楽寺書店), 2001, pp. 49-92, esp., p. 65 等。また、沼田一郎「ダルマ文献における sat の概念」『印度哲学仏教学』6 (1991), pp. 142-156 もヒンドゥー法典における sat の概念を検討した論文の中で sdh に触れ、tp である可能性を示す (p. 146f.)。
- 4) *The Pali Text Society's Pali-English Dictionary* s.v. Saddhamma では、Geiger 夫妻に倣って doctrine of the good という訳を与える他、the true dhamma, the best religion, good practice という訳も与える。また *A Critical Pali Dictionary* s.v. a-sad-dhamma も、夫妻の研究を参照させつつ、wrong (principles or) theories 等々の訳語を与える。
- 5) 坂本幸男・岩本裕『法華經(上)』(岩波書店), 1992 (第36刷), p. 410 で岩本氏は、sat の結合する複合語は kdh だとし、A. Thumb & R.

Haushild, *Handbuch des Sanskrit*, p. 400; F. Kielhorn, *A Grammar of the Sanskrit Language*, p. 255 の参照を要請する。しかし、両書は、kdh の一例として夫々 *sadbhāva*, *sadvedya* を挙げるのみであり、*sat* を前分とする複合語が必ず *kdh* であるとは一言も書いていない。また岩本氏は、*sdh* のチベット語訳が *dam-paḥi chos* (転写方式は岩本氏のママ) であることから、チベットでは *tp* と理解されていたとする。しかし、属格助辞は形容詞(句)を導出する時にも使われるから、この訳語からは「正しい人の法」か「正しい法」か、の判断は出来ない。

- 6) 以下、*pāli* 仏典は Pali Text Society 版を使用し、略号は *A Critical Pāli Dictionary* の *Epilegomena* に従う。なお、本稿の「正しい(人)」「法」という訳語は、議論を明確にするために機械的に付したラベルであり、厳密な検討を経た末の所産ではない。特に *sat* については、仏教徒がこれを如何なる概念下で使っていたかについて検討する余地が多くあると思われるが、本稿でその作業はなし得なかった。
- 7) 伊藤「鳩摩羅什」p. 5f. によれば、*Candrakīrti* の *Prasannapādā* では二カ所に *sdh* の解釈が見られるが、一方では *sdh* を *gen. tp* のみに解し、もう一方では *gen. tp* と *kdh* 双方の解釈を提示する。その箇所を挙げる (*ed. Poussin*):
- satām āryāṇām dharmāḥ saddharmāḥ*. 「正しい人々の〔つまり〕正統な人々の法が *sdh* である」(p. 487)
- satām āryāṇām kṛtakāryāṇām dharmāḥ saddharmāḥ. yadi vā śobhano dharmāḥ sakalasaṃsāraduḥkhaḥkṣayakarātvena praśaṃsanīyatvāt*. 「正しい人々の〔つまり〕なされるべきことをなしている正統な人々の法が *sdh* である。もしくは、輪廻の苦しみ全体の消滅をなすということによって賞賛されるべきであるということゆえに、綺麗な法である」(p. 592)
- 8) *Ps III* p. 117 の '*asaddhammasaññatti ti abhūtaḥkṣayasāññāpanā*' という説明は恐らく「生じていない法」、つまり *kdh* と思われるが、複合語での説明ゆえ、「生じていない人〔々〕の法」の可能性も残る。
- 9) 以下の *SN Sagāthavagga* は、宇井伯壽『印度哲學研究第二』(岩波書店)、1965 [再版]、p. 165 の分類では 2a に配置され、*Sn Pārāyanavagga* に次いで古いものとされる。
- 10) G. A. Somaratne 校訂本を使用。旧校訂本では vol. 1, p. 210 である。
- 11) 833 偈で *uttarā* という名が出るので、母親が親しみを込めて *uttarike* と呼び掛けたと理解した。
- 12) *buddhasēṭṭha* をどういう複合語として理解するかについて、上座部で

は意見が分かれる。即ち Pj I p. 181 は ‘... buddho ca so setṭho ca buddha-setṭho, anubuddhapaccekabuddhasamkhātesu vā buddhesu setṭho ti buddha-setṭho’ 「……そして彼は覚醒し最も優れているというので buddhassetṭha である。又は、続いて目覚めた者や独覚と称される、覚醒者らの中で最も優れているのが buddhassetṭha」とし、buddha と setṭha の関係を (1) 同格 (2) locative tp の二通りで理解する。一方 Ap-a p. 337 のように ‘buddhasetṭham ... setṭhassa buddhassa ...’ 「buddhasetṭham……とは最も優れている覚醒者の……」と、同格のみで説明する場合もある。同様に Ap-a p. 386: sikhissa giram aññāya buddhassetṭhassa tādino ti setṭhassa tādiguṇasamaṅgissa sikhissa buddhassa ... Ap-a ではこの他 uttamabuddha (p. 295) や buddhuttama (p. 568) と説明されるが、先の説明を踏まえれば「最上の buddha」と理解していたのだろう。buddha と setṭha の関係は、当時の仏教徒の buddha 観に繋がる重要な問題だが、今は問題を指摘するのみとした。

- 13) pāninaṃ を accusative singular と理解したが、単数である理由は不明。「生き物たる私」あるいは「生き物一般」? gen. plural の可能性もあるが、これは Spk-pt が採用し ‘pāninan ti sāmiatthe puthuvacanaṃ dukkhasaddāpekkhaṃ’ 「pāninan とは gen. の意味で dukkha という語に掛かる複数形」とする (ミャンマー版の CD-ROM を使用)。一方 Spk I p. 311 は ‘pānīne ti āharitvā vattabbam’ 「pānīne を持って来て (i.e. 補足して) から言われるべし」とし、pānīne を補って読むよう指示する。
- 14) Manfred Mayrhofer, *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen* によれば、√sodh は ‘reinigen, rein machen, jemanden reinigen’ であり、余分なものを削った末の「美」である。一方 √sobh は ‘schön sein, glänzen, schmückt, mach schön’ であり、何かを付加して生じる「美」である。sundara は sūnāra ‘lebenskräftig, mächtig, glücklich, schön’ からの派生語であり、生命力や力強さに基づく「美」である。
- 15) この表現は、ヒンドゥー法典文献にも存在する。沼田「sat の概念」を参照。また、筆者は徳永宗雄教授により入力された *Mahābhārata* 及び *Rāmāyana* の電子テキストを使用し、satāṃ dharma- の用例を検索したところ、18例発見された。参考までにその詩節番号を挙げる：1.69.46, 1.96.46, 3.198.70, 3.200.42, 3.259.36, 3.281.34=12.156.21, 3.297.30, 3.297.32, 5.93.54, 12.96.14, 12.140.19, 12.297.6, 12.324.5, 13.133.56, 14.38.1, 14.38.5, 14.46.51。また、*Rāmāyana* では 5 例：2.35.6, 2.69.20, 2.76.5, 4.18.15, 6.114.7。なお sdh については *Rāmāyana* には用例を見出せず、*Mahābhā-*

- rata* 3.246.3 の一例のみを発見したが、Nilakanṭha 註に *sdh* の説明は存在しなかった。
- 16) タイ・ミャンマー・ナーランダー版では *sataṃ dhammaṃ anussarati* とある。次註も参照。
- 17) CpA p. 255 は *anussarivā saddhammaṃ* という伝承に説明を与える。ごのように *sataṃ dhamma-* と *sdh* とが混交して伝承されること自体が、両者は交換可能な表現 — つまり *gen. tp* と理解していた証拠となる。
- 18) Somaratne の校訂本を使用。旧校訂本では vol. 1, p. 17。
- 19) この箇所の註釈 (Spk I p. 55) は *sdh* を教義的に説明し、*sdh* の格関係を解決する糸口にならない (*saddhammaṃ ti pañcasīla-dasasīla-catusatipatṭhān'ādi-bhedam saddhammaṃ*)。
- 20) *apadāna* の「特徴」という意味について、拙稿「*apadāna/avadāna* について」『待兼山論叢 哲学篇』34 (2000), pp. 32-35 を参照。
- 21) (6) (7) の例は、奈良康明「法華經における文体論的反复 (Repetition) (II)」『駒澤大学仏教学部研究紀要』22 (1964), pp. 1-25, esp. p. 9 による。なお同様の表現に、*Mahāparinirvāṇasūtra* 49.21: ... (*tad buddhasya buddhānubhāvena de*)*vatānāṃ* (*ca*) *d(e)v(a)tānubhāvena*。
- 22) *locative tp* と理解することについては、Vin I p. 11 の '*puvve ananussutesu dhammesu cakkhuṃ udapādi*' 「かつて聞いたことのない諸法に関し眼力が生じた」を参照。
- 23) Jan Gonda, *Stylistic Repetition in the Veda* (Amsterdam), 1959, p. 260f. を参照。Gonda が指摘するのは主にヴェーダ文献の用例であり、仏教・ジャイナ教は扱われていないので、若干の用例を示した。また Jared S. Klein, "Polypoton and Paronomasia in the Rigveda" *Anusantatyai: Festschrift für Johanna Narten zum 70. Geburtstag* (Dettelbach), 2000, pp. 133-155, esp., p. 139 も参照。
- 24) 単語索引のない *Painna* については、今のところ: *Bhattacharinnā* 166, *Viratthaya* 30, *Titthogāli* 1191 に用例を見出した (ed. Jaina-Āgama-Series)。同様に単語索引がなく、極めて成立が新しい *Mahānisīha* については、現時点で 3.14.7, 3.17.2, 3.30.9 に見出した (ed. Deleu & Schubring)。しかしこれらはその文中から *kdh* か *tp* か判断出来ず、註釈もない (か、出版されていない)。空衣派代用聖典については *Mūlācāra* と *Mūlārādhana* を同様に調べたが、*sdh* はない。
- 25) 本經の註釈は極めて多い。Royce Wiles, *The "Svetāmbara Canon": A Descriptive Listing of Text Editions, Commentaries, Studies and Indexes*

- (Canberra), 1997, pp. 144-149 は60種類の註釈を列挙するが、その殆どを筆者は参照し得なかった。
- 26) Ānandasāgara (ed.), *Śrīmant Uttarādhyayanāni: Jinadāsagaṇimahattara kṛtaya Cūrnyā sametāni* (Ratanapura), 1933. 参照にあたり、宇野智行先生のご助力を得た。
- 27) Dīparatnasāgara (ed.), *Āgama Suttāni (Saṭṭikam) Bhāga 28: Uttarādhyayanāni-Mūlasūtram 1* (Ahmedabad), 2000.
- 28) ジャイナ教における *nidāna* の本格的な研究は存在せず喫緊の課題だが、今は現在一般に承認されているであろう意味で訳した。榎本文雄「*nibbuta/nivvuda* について」『長崎法潤博士古稀記念論集 仏教とジャイナ教』（平楽寺書店），2005, pp. 560-553, esp., p. 554, 註22及びそこで挙がる諸研究を参照。
- 29) Padmasenavijaya (ed.), *Śrīmannemicandrācāryaviracitasukhabodhānāmnīyā Vṛttiyā Samalaṅkṛtaṃ Pūrvodhṛtajinabhāṣitaśrutasthvirasandṛbhaṃ Śrī Uttarādhyayanāsūtram* (Mumbai), 1982. この刊本には出版年が明確に記載されていないが、1982年の出版と判断することについては Wiles, *The "Śvetāmbara Canon"*, p. 155 を参照。
- 30) 例えば Vin I p. 4; DN II p. 36; MN I p. 167; SN I p. 298 等の 'adhigato kho my āyaṃ dhammo gambhīro duddaso duranubodho santo paṇīto atakkāvacarō nipuṇo paṇḍitavedanīyo' 「私によって到達されたこの法は、深遠で、見難く、理解し難く、santo、優れ、思考の及ぶところではなく、微妙で、賢者の知るべきものだ」における *santo* の梵語形を原文から判断することは困難だが、註釈が *nibbuta* と説明すること (Sv II p. 464; Ps II p. 174; Spk I p. 195) や、*Lalitavistara* の平行箇所 (ed. Lehmann, p. 392) で *śānta* とあることから、*śānta* と判断し得る。

(文学研究科助手)

SUMMARY

On the Compound *saddharma*

Yutaka KAWASAKI

Mr. and Mrs. Geiger propose in their *Pali Dhamma* that *saddhamma* should be understood as a genitive-*tatpuruṣa* and not a *karmadhāraya*. Although this opinion is well known, it seems that no studies have ever tried to verify whether it is right or not. Therefore I, using texts that Geigers did not see, examined as what kind of compound *saddhamma* was understood in Pāli and Jain literature and pointed out the followings:

(a) In Pāli *atthakathās saddhamma* is understood as (1) a genitive-*tatpuruṣa* only, (2) a genitive-*tatpuruṣa* or a *karmadhāraya*, or (3) a *karmadhāraya* only.

(b) *Saddhamma* is expressed as *buddhasettḥassa dhamma . . . satthuno* in *Samyuttanikāya* X.7. It is clear that *sat* is replaced by *buddhasettḥassa . . . satthuno* and this shows that at least some of old Buddhists understood *saddhamma* as a genitive-*tatpuruṣa*.

(c) The pleonasm *satam saddhamma* seen in *Samyuttanikāya* I.4.1 seems to indicate that *satam* qualifies the case of the former member of *saddhamma*, like *buddhasya buddhānubhāva, gāmassa gāmasimā*, and so on.

(d) There are few instances of *saddhamma* in Śvetāmbar Jain canon and some of later commentators understand it as a *karmadhāraya*.

キーワード : *saddharma/saddhamma, tatpuruṣa, karmadhāraya*